

## 音 韻 (理論・現代)

相 澤 正 夫

## 一 はじめに

「平成八年・九年」の二年間に、「国語学界」という言語研究の世界で、「音韻(理論・現代)」を対象とする研究活動がどのように展開されてきたのか。現状を把握しつつ、今後の方向を展望するのが与えられた課題である。

標題をまともに受け取って、対象を「音声の体系・構造に関わる研究」に限定することはしない。「音声の変異・運用に関わる研究」にもできるだけ目配りをする。言語それ自体の内的な法則性に関する面ばかりでなく、同時に言語を使用する人間の側のさまざまな要因も問題にしたいと考えるからである。現代日本語を中心に言語の音的側面に関わる重要な研究であれば、国語学という枠をこえて広く自由に取り上げることが全体の基本方針としたい。

## 二 研究活動の概観

研究活動は、口頭発表や論文の形で公表されたとき、初めてその存在が認知される。情報発信なき研究活動はゼロに等しい、そう言い切る研究者もいる(東倉洋一「音声知覚研究の活路を求めて」(「日本

音響学会誌」52-11、平8・11)。

口頭発表を例に取ろう。この二年間、国語学会の春と秋の研究発表会では、総計八二件の発表が行われている。このうち「音韻(理論・現代)」に関係するものは、前述のゆるい基準で数えても七件、全体の八・五%に過ぎない。きつい基準で見れば、わずかに二件、二・四%に止まる。同時開催の方言研究会で総計三〇件中の一三件、四三・三%に達するので、合わせてようやく一二二件中の二〇件、一七・九%となる。「国語学界」という世界の輪郭は必ずしも分明でないが、中心をなす二つの研究発表会を見る限り、全体の二割弱がこの分野に関連する研究発表ということになる。

このように、「音韻(理論・現代)」という枠に該当しそうな口頭発表を見る限り、国語学界では、変異・運用に関わる研究はある程度行われているものの、体系・構造に関わる研究はほとんど目につかないと言つてよい状態にある。少なくとも、春と秋の学会参加者の印象は、そんなところに落ち着くだろう。

それでは、現代日本語を中心とした言語の音的側面に関する研究活動は、全般に停滞しているのだろうか。答えは否である。現実にはむしろその逆であり、国語学界の周辺に少し目を転じるだけで、

そのことは明らかとなる。すなわち、この二年間の日本音声学会の活動は実に活発であった。

日本音声学会は平成八年に設立七〇周年の節目を迎え、機関誌で記念特集「音声研究の展望」(『音声学会会報』21、平8・4)を組んだ。調音音声学(壇辻正剛)、音響音声学(前川喜久雄)、音韻理論(本間猛)、アクセント研究(上野善道)、日本の音声教育(土岐哲)、海外の音声教育(日比谷潤子)、心理音声学(寛一彦)、音声データベース(板橋秀一)、生理音声学(廣瀬肇)の九分野にわたり、最適の執筆者による有益な展望論文を掲載している。多様化する音声研究の現在を知ろうえて、時宜に適った好企画であった。特集号はさらに「方言音声研究」(『音声学会会報』22、平8・8)、「最適性理論の動向」(同23、平8・12)と続き、個別分野での研究活動の活性化も図られた。

このような流れの中で、平成九年には学術論文主体の機関誌『音声研究』が誕生する。二一三号を数えるに及んだ「音声学会会報」と、二三輯まで刊行された不定期の論文集『音声の研究』は、ここに統合されることとなった。それぞれに分担されていた機能が一本化され、本格的な学術雑誌として再出発したのである。これは研究活動の水準をさらに高め、公平な評価の場を提供するという点で大きな意義をもつ出来事であった。

新機関誌は年三回の刊行で、平成九年には第一巻第三号まで刊行された。基本的な内容構成は、特集論文、研究論文、書評論文、書評となっている。特集のテーマは、創刊号から順に「音声学の教育の現状と問題点」(『音声研究』1-1、平9・4)、「アクセントの理論」(同1-2、平9・8)、「音声の対照研究」(同1-3、平9・12)と多彩で、情報提供、あるいは啓蒙・啓発的な面にも力を入れている。専

門化が加速する現在、学会員ができるだけ共通の基盤に立てるようにとの配慮が感じられ、全体のレベルアップにとつては望ましいことである。機関誌とは別に、年一回「音声学セミナー」を開催しているのも、そのような姿勢の表われと理解できる。ちなみに、テーマは平成八年が「発音のメカニズム」、平成九年が「最近の音韻論の動向——理論と実践」であった。

この二年間の動きを概観して改めて気づくことは、現代日本語を中心とした言語の音的側面に関する研究活動が、いわゆる国語学界の内側というよりも、むしろその周辺、あるいは外側で盛んであるという事実である。日本音声学会の活動は、その典型的な事例にすぎない。このような傾向は、おそらく昔からあったものと思われるが、ここへ来てさらに一段と鮮明になったのではないか。

音声研究は、そもそもが学際領域である。個別のさまざまな専門領域が、「音声」を介して接触し合う共通の場を形成している。その対象と方法の多様な広がり、人文系の研究者も再度認識すべき時が来ているように思う。本稿では、以下に展望号の恒例に倣って、公表された研究成果をジャンル別に追いながら、音声研究の現状を探ってみる。但し、軸足は人文系の言語研究におかざるをえないので、それなりの偏りがあることは予めお断りしておく。

### 三 研究成果と音声研究の現状

研究成果としての刊行物を、大きく「論文集・単行本」と「研究論文」とに分けて扱う。前者に含まれる個々の研究論文を、必要に応じて後者の適当なジャンルで言及することがある。

### 三・一 論文集・単行本

前期展望(一八五集、窪蘭晴夫氏担当)で刊行予告のあった文部省重点領域研究「日本語音声」の成果が、研究代表者杉藤美代子氏の監修で二巻の論集にまとめられた。佐藤亮一・真田信治・加藤正信・板橋秀一編『日本語音声1 諸方言のアクセントとイントネーション』、国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫編『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』(三省堂、平9・7)である。予告は全三巻であったが、言語教育関係の論文を独立させなかつたことで二巻構成になったという。内容的にはほとんど報告済みのものばかりであるが、これでも一般にも近づきやすい形となり、平成の冒頭を飾った大プロジェクトに一区切りがつけられた。日本語の韻律の全体像をバランス良く解説しており、この分野を概観するのに最適の内容になっている。

同じく予告のあった関西の音声研究者を中心とする学際的な研究会(代表世話役は杉藤美代子氏)の成果も、音声文法研究会編『文法と音声』(くろしお出版、平9・5)として刊行された。タイトルの示す通り、文法と音声、特に統語構造・談話構造と韻律の特徴の多面的な結びつきをめぐって、一四編の論文が発想豊かに論を展開している。会の発端は重点領域研究「日本語音声」であったと聞く。人的交流の大切さを教えてくれる企画としても貴重であった。

杉藤氏の個人論文集『日本語音声の研究』シリーズも、『3 日本語の音』(和泉書院、平8・2)、『2 日本人の英語』(同、平8・10)、『4 音声波形は語る』(同、平9・7)と順調に刊行が続いた。また、

同氏の著作には『声に出して読もう!——朗読を科学する——』(CD付き) (明治書院、平8・6)、『大阪・東京アクセント音声辞典CD-ROM

(ウィンドウズ95対応版)』(丸善、平8・2)もあつた。豊富な音声情報をCD-ROMで提供する出版形態は、今後ますます盛んになってゆくであろうが、杉藤氏はその先鞭をつけられた。

現代語を中心に音声関係の論文を数多く収める大部の記念論文集として、『言語学林1995-1996 編集委員会編『言語学林1995-1996』(三省堂、平8・4)、平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点 上・下』(明治書院、平8・10)があつた。前者は、実は柴田武氏の喜寿を祝う記念論集であるが、約八〇編のうちの四分の一、二〇編余りを音声関係の論文が占めている。後者は平山輝男氏の活躍された領域を反映して、方言研究を主体とする約九〇編の論文のうち、やはり二〇編余りをアクセントを中心とした音声関係の論文が占めている(下巻に集中、巻末には「日本語アクセント研究年表(1987-1995)」を付す)。両者合わせて五〇編に近い論文群はまさに壮観で、この領域の潜在的な活力を物語っている。

個人の著書・論文集としては、今石元久『日本語音声の実験的研究』(和泉書院、平9・5)、城生佰太郎『実験音声学研究』(勉誠社、平9・12)の二冊が、タイトルに「実験」を謳つた点で目を引いた。前者は、主に方言音声の音響スペクトル分析を通して、各地方言の成立にまで説き及ぶという、独自の新しい方言学を志向したもの。後者は、音響スペクトル分析、人工口蓋、呼気流量、脳波解析など、著者が手がけた実験的手法による音声研究の現時点までを総括したもの。文科系の研究者である自分が、なぜ実験的研究を行うようになったか、その経緯もそれぞれに語られていて興味深い。

海外の刊行物では、D. Robert Ladd *Intonational Phonology* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996) v' Takashi Otake

and Anne Cutler eds. *Phonological Structure and Language Processing: Cross-Linguistic Studies* (Mouton de Gruyter, 1996) の二冊が、従来の理論的研究と実証的研究を総合する立場からまとめられたものとして注目される。前者は、多様に分岐したイントネーション理論を、もう一度共通の枠組みで捉え直そうと試みた単独の著作。後者は、モーラ・音節という二つの韻律単位が、音韻理論的にも音声知覚的にも重要な役割を担っているとする立場の論文を一編を集成したもの。『音声研究』1-2 (平9・8) には、早くも両者の書評が掲載されている(担当は、前者が窪園晴夫氏、後者が山根典子氏)。

ロマン・ヤーコブソンの共時音韻論、通時音韻論に関する論考を収めた訳書も、服部四郎編、矢野通生・米重文樹・長嶋善郎・伊豆山敦子訳『構造的音韻論』(岩波書店、平8・2)として刊行された。ヤーコブソンの著作は、すでに「古典」として読むべきものであろうが、本書「はしがき」(服部氏執筆)には、両博士の交流が記録映画のように生き生きと描かれていて楽しい。

音声学書の刊行も盛んであった。小泉保『音声学入門』(大学書林、平8・9)は、オーソドックスな一般音声学の入門書、斎藤純男『日本語音声学入門』(三省堂、平9・11)は、日本語に重点をおいた新しいタイプの一般音声学の入門書である。竹林滋『英語音声学』(研究社、平8・9)は、「英語」を謳っているので気づきにくいだが、前半の一般音声学の記述もきわめて充実している。訳書には、レイ・D・ケント/チャールズ・リード著、荒井隆行・菅原勉監訳『音声の音響分析』(海文堂出版、平8・5)があった。原著は、Ray D. Kent and Charles Read *The Acoustic Analysis of Speech* (San Diego: Singu-

lar Publishing Group, Inc. 1992) である。音響音声学と言えど、Peter Ladefoged *Elements of Acoustic Phonetics* (Second Edition) (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1996) が刊行され、名著が初版以来三四年ぶりに大幅に改訂された。但し、『音声研究』1-3 (平9・12) に掲載の前川喜久雄氏の書評によれば、少なからぬ誤植が含まれているとのことである(誤植リストは同書評参照)。

### 三・二 研究論文

大きく「音韻理論」「アクセント」「イントネーション」「韻律単位」「その他」の五つに分けて扱う。

#### 三・二・一 音韻理論

前期展望で新しい音韻理論として大きく取り上げられた最適性理論 (Optimality Theory) の紹介論文と、この枠組みによる日本語の分析事例が国内でも現れるようになった。本間猛「音韻理論研究の展望」(『音声学会会報』211、平8・4) は、「音韻理論花盛り」という表現で、この理論をめぐる内外の音韻理論研究の活気を伝えている。一言で言えば、従来の「規則による派生」という基本的な考え方を否定し、「制約」だけで言語事象を記述・説明しようとする理論ということになるが、この転回の意味するところと衝撃の大きさは、従来の音韻理論研究にどっぷりと浸ったことのない者には、いま一つ実感が湧かないのではなからうか。

そんななかで、窪園晴夫「派生か制約か 最適性理論入門(上)(中)(下)」(『言語』25-4~25-6、平8・4~平8・6) は、最適性理論に至る理論的研究の流れを把握するうえで、きわめて有益な解説論文

である。欧米流の言語研究を支える一般化への強い意志が、理論的研究をさらに前へと駆動してゆく様子がよく描かれている。現在の最適性理論も、そんな流れの中の一コマとして適切に位置づけられていると感じた。

最適性理論をはじめ、制約に基づく音韻理論の枠組みを適用した研究として、以下のものが目に入った。いずれも理論の検証と洗練を目指したものである。平野日出征「最適性理論と分節音削除現象」(『東北大学言語学論集』5、平8・3)、本間猛「最善性理論と不完全指定」(『音声学会会報』213、平8・12)、那須昭夫「二字漢語における促音化現象—最適性理論による分析」(『音声学会会報』213、平8・12)、北原真冬「音韻論と文法—借用語の促音とアクセントの分析を通して—」(『文法と音声』(くろしお出版、平9・5)、松井理直「日本語の語彙における音韻素性と制約」(『大阪大学言語文化学』5、平8・3)。

私見では、「規則」による派生」がきわめて「言語」寄りの理論であるのに対して、「制約」は言語を使用する「人間」の側の要因を取り込んだ理論である。複数の可能性が候補として競合するとき、最終的に不都合の少ない選択をせまるのは、言語ではなく人間の方だと考えるからである。言語という既存の資源をうまく使って、変化してやまない環境に何とか適応してゆく、そういった人間像に適合する理論として、今後の展開が楽しみである。

### 三・二・二 アクセント

今期も、アクセント研究はきわめて盛んであった。重点領域研究「日本語音声」を契機に盛り上がった気運が、そのまま持続している印象である。

そんななかで、アクセント研究全般に対して、個人的な要望を交

えて課題提起を行った展望論文に、上野善道「アクセント研究の展望」(『音声学会会報』211、平8・4)がある。アクセントの機能、実験、音声学、アクセントの世界分布図、歴史比較研究、社会言語学と、広範囲にわたる課題が熱心かつ率直に語られている。比較方法に対する誤解を解くための一節などは、健全な議論のために不可欠のものである。ただ、文献への言及が省略されているため、理解に困難を感じる読者があるかもしれない。上野氏には「私のアクセント理論—フィールドワーカーの視点—」(『音声研究』112、平9・8)もあつた。これも同氏の研究上の立場・目標を明快に語っていて有益である。

複合語アクセントをめぐる議論は、守備範囲を広げながらもますます活況を呈している。上野善道「語構造の違いはアクセントに反映されるか—同音語の例に基づく考察—」(都立大「日本語研究」16、平8・4)は、語構造の違いが常にアクセント面に反映されるわけではなく、むしろ反映されない方が多いことを実例で示し、その理論的な裏づけを行ったもの。窪蘭晴夫・伊藤順子・Armin Mester「音韻構造からみた語と句の境界—複合名詞アクセントの分析—」(『文法と音声』(くろしお出版、平9・5)は、従来の複合名詞アクセント規則では説明できない中間的なタイプを提示し、日本語では音韻的な語と句(二語の連続)の境界が連続的(あいまい)であるとす。上野善道「複数のアクセント単位からなる複合語」(『言語』25-11、平8・11)は、一アクセント単位に納まらない複合語(窪蘭らの「句」に相当)について、東京・関西方言以外の各地方言のデータも加えて、その特徴と異同を広く概観したもの。句レベルの意味構造とアクセント現象を扱った論考には、郡史郎「当時の村山首相」の二つの意味と二つの読み

——名詞句の意味構造とアクセント弱化について——(「文法と音声」があった。アクセント単位に関連する新鮮な議論として、定延利之「ミスマツチを収容できる言語観を求めて」(「文法と音声」が目を引いた。「ミスマツチ」は、言語表現の意味の区切れと形式の区切れが一致しない現象をいうが、アクセント論でも「グリコ森永事件」のような複合語で問題となる。定延氏は、これを無理なく説明するためには、言語記号観を離れ、話し手の心内行動に言及する言語行動観に立つ必要があるとする。ここにも言語の使い手としての人間の側に現象の説明原理を求める姿勢が見られ、時代の流れを感じる。

アクセントの理論的研究の発展には、記述的研究の充実が欠かせない。その上に、信頼のおけるデータが十分に蓄積されている必要がある。栗林均「現代日本語のアクセントの型の分布——「電子ブック版大辞林」を資料として——(「日本大学文学部人文科学研究所「研究紀要」51、平8・3)は、データ蓄積(と電子媒体化)の賜物と言える。このような辞書のアクセント情報による研究は、概観を得るにはよいが限界もある。アクセントの変異の実態が、陰に隠れて見えないからである。大都市東京・京都の変異の実態については、相澤正夫「語の長さ」とアクセント変化」(「国立国語研究所研究報告集」17、平8・3)、

中井幸比古「京都アクセントの個人差について」(「計量国語学」21・1、平9・6)に報告がある。また、分析対象とするデータの選択が結果に影響することを示し、資料評価の必要性を説いたものに、相澤正夫「『東京語アクセント資料』と辞書アクセント——尾高型アクセントを事例とした資料評価——」(「日本語科学」1、平9・5)がある。今後は、理論的研究の要請にも答える形で、各地のアクセント資料がさらに整備されてゆくものと思われる。その端緒は、中井幸比古編「高知市

方言アクセント小辞典——方言アクセント小辞典(二)——」(「科研費報告、平9・11)などによってすでに開かれている。

### 三・二・三 イントネーション

イントネーションに関する研究は、音声文法研究会のメンバーによる論考に新しい方向が示されているので、重点的に取り上げる。前川喜久雄「日本語疑問詞疑問文のイントネーション」(「文法と音声」(くろしお出版、平9・5)は、実験的研究によって疑問詞疑問文と真偽疑問文のイントネーションに顕著な差異があることを示し、さらに疑問詞疑問文の述語のアクセント核が、削除されたかに見えるて実は保存されていることを生成・知覚の両面から立証して、従来の音韻論的解釈に新たな問題提起を行っている。

ニツク・キャンベル「プラグマティック・イントネーション……韻律情報の機能的役割」(「文法と音声」)は、韻律とそれが表わす情報の種類を階層構造として捉える、プラグマティック・イントネーション理論(P-I理論)に基づいて、躊躇やためらいなど話者の意図レベルの情報をイントネーションの分析によって認識可能にする手法を紹介している。音声自動認識を指す研究開発の一面面を示す研究であるが、七段階からなる韻律情報の階層表は、文系的な音声言語行動の研究にも大いに参考になる。

文末に位置する言語成分とイントネーションの関係を論じたものには、森山卓郎「一語文とそのイントネーション」(「文法と音声」)、小山哲春「文末詞と文末イントネーション」(同)、片桐恭弘「終助詞とイントネーション」(同)の三編があった。

森山氏の論文は、感動詞、接続詞などの独立成分、名詞、修飾成分、述語成分、誘導成分などの一語文と上昇イントネーションとの

関わりを分析したもので、上昇イントネーションの基本的な機能を「情報的に充足していない」という探索的態度の表示」であるとす。小山氏の論文は、文末イントネーションと文末詞は相互に独立の伝達標識であるという前提に立ち、双方がそれぞれの意味・機能を有しながら結合することによって発話の意味が決定されるとする。片桐氏の論文は、対話を共同行為として捉える立場から、終助詞ヨ・ネの機能と文末イントネーションの相互作用を論じている。終助詞とイントネーションとがあいまって、共同行為の円滑な遂行のために対話調整機能を果たしていると思えば、さまざまな現象がうまく説明されると主張する。

イントネーションの研究が、これからのダイナミックな音声言語研究の中核テーマであることが、これらからも十分に察せられる。

### 三・二・四 韻律単位（音節・モーラ・拍）

韻律単位に関する論文もいくつか目についた。Haruo Kubozono 'Syllable and Accent in Japanese: Evidence from Loanword Accentuation'（『音声学会会報』21、平8・4）は、モーラ言語とされる日本語（東京方言）において、外来語アクセントの基本的特徴が音節を基本単位として一般化できることを示し、この外来語アクセント規則が、ラテン語や英語のアクセント規則と酷似していることを指摘する。横谷輝男「フット境界を越えるアクセント移動」東京方言複合名詞からの証拠」（『音声研究』1-1、平9・4）は、母音の無声化するモーラに、複合語アクセント規則によってアクセント核が指定された場合、その移動する範囲がフット境界を越えることがあることを示し、新たにより上位の韻律単位である大フットを想定する必要がありと主張する。

知覚実験によって、日本語に音節という単位を設定することの傍証を与えたものに、松崎寛「日本人の「音節」と「拍」の知覚——外来語聴取実験を通じて——」（『東北大学文学部日本語学論集—言語学・国語学・日本語教育学—』6、平8・9）がある。氏の実験結果によれば、特殊拍と自立拍は日本人の知覚面において大きく異なるという。また、窪蘭晴夫「日本語の韻律構造とその獲得」（『音声言語医学』38-3、平9・7）は、最近の日本語韻律研究の成果から音韻発達の研究にどのような知見・示唆が得られるのか、主に韻律単位とその構造に注目ながら解説したものである。

その他、特殊拍を扱った論文には、那須昭夫「現代日本語での「の」と撥音の交替——音上の特徴から見と撥音形の容認性に関する一傾向」（筑波大『日本語と日本文学』22、平8・2）、伊藤友彦・辰巳格「特殊拍に対するメタ言語知識の発達」（『音声言語医学』38-2、平9・4）、荒井雅子・川越いつえ「英語からの借用語の促音・ナンセンス語による知覚テスト報告」（『音声学会会報』23、平8・12）、佐藤ゆみ子「日本語の音節末鼻音（撥音）のモーラ性」（『音声学会会報』21、平8・8）など、多彩なアプローチがあった。

### 三・二・五 その他

ここでは、今期、本学会誌に掲載された音声関係の論文のうち、新たな展開を見せたものについて簡単に触れる。

分野としては史的研究に属するが、松森晶子「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」（『国語学』189、平9・6）、木部暢子「18世紀薩摩の漂流民ゴンザのアクセントについて

——助詞のアクセントとゴンザアクセントの位置づけ——」（『国語学』191、平9・12）の二編は、より一般的な見地から対象を捉ええたことが、問題解決

につながった好例ではないかと思われる。前者は、音調言語におけるダウンステップ現象への着目、後者は、長音節と短音節の区別がその決め手となった。

前川喜久雄・吉岡泰夫「発話の丁寧さに対する語彙的要因と韻律的要因の寄与」(『国語学』190、平9・9)は、発話の丁寧さを形成する要因として、正面からイントネーションを取り上げた点が新しい。語彙的要因のみで発話の丁寧さを云々することが、いかに現実の話しことばから掛け離れた態度であるか、これで証明されたことになる。これからの音声言語研究が、言語的情報とともにパラ言語的情報も等しく対象とすべきことが、方向として示されたと言えよう。なお、この『国語学』掲載論文が、すでに理工系の雑誌で引用されていることを付記する(寛一彦・永原敦示「音声の意味情報と感性情報」〔Computer Today〕15-1、平10・1)。

#### 四 おわりに

今期の研究成果をひととおり見わたして、改めて認識させられたことに、重点領域研究「日本語音声」が、さまざまな意味でこの分野の起爆剤だったということがある。研究成果の収穫は今なお続いているが、それにも増して、広範囲に人的ネットワークを形成したことの意味が大きいと感じた。

言語の音的側面に幅広く目配りした研究スタイルが、次第に定着しつつあることも、今期の特徴ではないかと思う。伝統的な音声・音韻研究が着実に行われている一方で、新しい研究領域が急ピッチで開拓されていることも事実である。理工系と連携したさまざまな「話しことばの研究」は、その代表的な事例と言えよう。

第二節の冒頭に引いた東倉論文を読むと、音声研究の対象が何と多様であることかと改めて目をみはらされる。人文系という枠組みにとらわれるのは、もはや得策ではないし正解でもない時代がきている、それがこの展望を終えるにあたっての実感である。

— 国立国語研究所員 —